

名古屋城コース詳細

① 名古屋城正門（なごやじょうせいもん）



ここは昔、三之丸から西之丸へ通じるところだった。西之丸榎多御門があったが、明治24年の濃尾地震で破損した。
明治43年、旧江戸城蓮池御門を移築し国宝に指定されていたが、戦災で焼失した。両脇櫓台の石塁を残すのみだったが、昭和34年、天守閣と共に鉄筋コンクリート造りで原形どおり再建された。

② 西南隅櫓（せいなんすみやぐら）



名古屋城創建当時の面影を伝える建造物で、重要文化財。
外観は2層屋根だが、内部は3階建てになっている。
軍事用の「石落とし」を張り出しているのが特色。平素は書庫として利用されていたが、「家康が、わが子・義直の夫人高原院の嫁入行列をこの櫓から望見した」という故事にならって、歴代藩主もよく登ったという。
濃尾地震で石垣とともに崩壊したが、宮内省によって修理修復され、鬼瓦などに菊花紋が見られる。

③ 表二之門（おもてにのもん）



この門も名古屋城創建当時の建造物で、重要文化財。
古くは南二之門と呼ばれ、本丸の南端にあたる。
門柱、冠木とも鉄板張りで、用材は木割り太く堅固な構造になっており、左右に続く土壁も鉄砲狭間を設けた元の姿をよく残している。形式的には高麗門に属する門である。

④ 東南隅櫓（とうなんすみやぐら）



本丸の東南の隅にあり、名古屋城創建当時の建造物で、重要文化財。
辰巳櫓とも呼ばれ、構造は西南隅櫓と同じく外観は2層屋根、内部は3階になっているが、「石落とし」の形状は同一ではない。歴代藩主はしばしばこの櫓に登り、遠見を楽しんだという。
この櫓は、建設当時の姿を伝えるのもので、鬼瓦などに葵の紋が見られる。

⑤ 本丸御殿（ほんまるごてん）※復元工事中



天守閣の南、本丸のほぼ中央に、南面して建てられた書院造りの大建築群があった。玄関、表書院、対面所、梅之間、上洛殿、御湯殿書院、黒木書院、上御膳所などから成り、二条城の二之丸御殿と並ぶ書院建築の双壁とされていたが、戦災で焼失した。
本丸御殿は実測図や古写真など豊富な史料に基づき復元が可能であり、平成21年に復元工事に着手した。現在、平成30年の全面完成をめざし、復元過程を公開しながら工事を進めている。

⑥ 天守閣（てんしゅかく）



石塁は加藤清正が築いたもの。穴蔵ならびに穴蔵内井戸の姿をよくとどめ、小天守石塁とともにいわゆる連結式天守の代表例とされる。
天守閣は昭和20年5月14日の戦災で焼失したが、34年に鉄筋コンクリート造りで再建された。
1階から5階までが展示室となっており、焼失をまぬがれた襖絵などを展示している。

⑦ 清正石（きよまさいし）



城といえば石塁。美しい勾配と大小さまざまな石たちの表情が見どころだが、名古屋城には普請（石塁工事など工事全般）の指揮をとった加藤清正にまつわるエピソードが多い。
清正石というのは、本丸東一之門の枡型石垣の中にあり、横6メートル・縦2.53メートル、10畳敷きの大きさ。清正が運んだと言い伝えられている。

⑧ 西北隅櫓（せいほくすみやぐら）



清洲櫓とも戌亥櫓とも呼ばれ、重要文化財。
天守、御殿などがほぼ完成した慶長19年(1614)より5年遅れた元和5年、清洲城ゆかりの古材などで建築された。
御深井丸の西北隅にあり、広い水堀に臨んだ3層屋根、内部3階、白塗籠、入母屋造りの姿は荘重で安定感に富んだ美しさ。
外部北面、西面に千鳥破風が作られ、「落狭間」を備えている。

⑨ 二之丸庭園（にのまるていえん）



元和年間(1615～24)、二之丸御殿の建築にともない、御殿の北側に設けられた庭で、枯山水回遊式。築山は高く陰しく、谷は深く複雑に大樹を茂らせた城郭庭園の典型だった。
明治以降、城内が軍隊に使われたことから荒廃したが、昭和41年、名古屋市の手で一部を整備し公開された。作者は上田宗箇説が有力。

⑩ 二の丸茶亭（にのまるさてい）



二之丸庭園の公開にともない、昭和44年10月に開設されたお茶所。「茶どころ」が代名詞の名古屋のシンボルがお城なら、名園散策のついでに天守を仰いで「まずは一服」と参りたいもの。
戦火で焼けた金シャチの残塊で作られた金の茶釜（ここにあるのは純銀生地、22金鍍金）も名物的存在になっている。